

ラサリーラー

愛のマンダラ

『バガヴァタ・プラーナ』の物語より

第4部

ラーダーが得た教訓

クリシュナ神がラーダーと共に森の中の空き地を去ったのは本当でした。そしてラーダーが疲れ果てた時、クリシュナがラーダーを腕の中に抱き上げ運んだのも本当でした。その夜、他のゴーピーたち皆と共にラーダーが踊っていた時、クリシュナは彼女が愛の感情の中にすっかり没入しているのが分かりました。ラーダーは見返りに何も求めませんでした。他の数々のクリシュナが消えて彼女の周りに失望の泣き声が上がった時も、ラーダーは自分の体験の中に完全に没頭していたので全く気づきませんでした。そしてクリシュナ神は、この純粋なバクティを認めて、体験の中に彼女をもっと深く導いていきたいと思いました。クリシュナ神はラーダーの手を取り、銀白の砂に沿って、月の光に照らされた森の中へと彼女を導いたのでした。ラーダーが疲れると、クリシュナは彼女を抱き上げ運びました。この時までには、自分が何者で、どこにいるのかという感覚は、ラーダーから完全に無くなっていました。時空を超えた、クモの糸のように繊細な至福の繭の中にいるかのようにでした。

少したって彼らが木の下で休んでいる時、ラーダーはどこにいるのかという感覚を取り戻しました。彼女はクリシュナ神を不思議そうに見詰めました。クリシュナの目は無限の淵のようです。ラーダーを奥へ奥へと引き込み、そうして宇宙のまさにその源へたどり着いたに違いないと思わせました。その瞬間、ラーダーは理解したのです。「彼は本当にあまねく広がる神に違いない！ 彼は全世界を愛の中に浸すのだ！」と、ラーダーは言いました。それから考えが浮かびました。「そして私だけがこのことを理解している。私はそれほどまでに彼を愛しているのだから」

そう考えた時、彼女の得た至福は消えてしまいました。クリシュナはいなくなり、そして彼女は森の中で一人きりになってしまいました。仲間だった他の女性たちさえもいません。今、ラーダーは、激しく身を焦がすような苦悩に包まれてしまったのです。

「クリシュナ、私の最愛の人よ、私の神よ、どこへ行ってしまったのですか？」と、彼女は泣きました。

鈴の音のようにはっきりと、ラーダーはクリシュナの声を彼女の内側に聞きました。

「私は失われてはいない。私は隠されただけだ。さあ、あなた、そして皆が、私を見つけるのだ」

しばらくして、ラーダーは下の道から少女たちの声を聞きました。そして、仲間たちが彼女を取り囲みました。何人かはラーダーがクリシュナの居場所を知っているに違いないと疑っていました。ラーダーが自分たちと同じくらいぼうぜんとしているのが分かって、彼女に哀れみを感じている者もいました。ラーダーは、彼女が最後に聞いたクリシュナの言った言葉を繰り返しました。

「私は失われてはいない。私は隠されただけだ。さあ、あなた、そして皆が、私を見つけるのだ」

これを聞いて、クリシュナは彼女たちにいたずらをしているのだと、ゴーピーたちの意見は一致しました。これは彼の遊びの一つにすぎないのだろう。そして、彼女たちは彼を見つけるだろうと。

